

『竹取物語』研究

——中国神仙譚と比較して見る『竹取物語』の真髄——

小町 佑希

一 はじめに

『源氏物語』絵合巻で、『竹取物語』は「物語の出できはじめてのおや」と評された。その言葉通り、同物語は日本最古の物語として人々に親しまれ、今日に至るまで「小さ子伝説」「異常出生譚」「致富長者譚」「語源（地名起源）譚」「難題求婚譚」「天人女房譚」「昇天譚」といった部類に切り分けられ、多角的に考察されてきた。昇天場面において、かぐや姫を迎えに來た天人の「王とおぼしき人」が「かぐや姫は罪つくりたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり」と発言するが、罪を犯して下賤の地に墮とされるという構図は、しばしば神仙譚に見受けられる。そうした神仙を「謫仙」といい、一定期間を人間界で仮住まいをし、期限が満ちると世を去って、また仙を得ると信ぜられている。^{注2}昇天の際にかぐや姫が授けた「不死藥」が尸解藥として神

仙譚に頻出する物であることから、『竹取物語』が神仙譚の要素を多分に含んでいることが窺える。

かぐや姫を謫仙ととらえ、神仙譚として『竹取物語』を考えたとき、かぐや姫の「人間化」のさまや劇的な昇天場面は、謫仙としては異様ではないか。本稿では、『竹取物語』以前もしくは同時期の成立で、かぐや姫同様に「謫せられた女仙」を記した神仙譚として、『太平廣記』の「萼綠華」「杜蘭香」「黃觀福」「崔少玄」「趙旭」「妙女」を選んで比較し、同物語の独自性を考察する。

以下に引用するのは『太平廣記會校』^{注3}を底本とし、筆者が句読点を補った書き下しと、大意を示したものである。

二 中国神仙譚との比較——悲しむ人間、泣かない女仙

・道士の優位を説く女仙——「萼綠華」（女仙二部）出「真誥」

萼綠華は、女仙なり。（略）晉の穆帝の昇平三年己未十一月十

日夜を以て羊權の家に降る。(略)此より一月に輒ち六たび其の家に過る。權字は道學、即ち晉の簡文の黃門郎、羊欣の祖なり。權及び欣皆潛かに道要を修め、玄に耽り真を味はふ。

綠華云へらく(略)「是れ九嶷山中の得道の羅郁なり。宿命の時、曾て其の師母の爲に乳婦を玄洲に毒殺す。先の罪未だ滅せざるを以ての故に暫く臭濁に謫せられて降り、以て其の過ちを償ふ。」と。權に詩一篇、並びに火浣布手巾一、金玉條脱各一枚を贈る。(略)權に謂ひて曰はく「慎みて我が下降の事を泄らすこと無かれ。之を泄らせば、則ち彼此罪を獲ん。」と。因りて曰はく「修道の士、錦繡を視ること弊帛の如く、爵位を視ること過客の如く、金玉を視ること礫石の如し。(略)世人は嗜欲を行ひ、我は介獨を行ひ、世人は俗務を行ひ、我は恬淡を學び、世人は聲利に勤め、我は内行に勤め、世人は老死を得、我は長生を得ればなり。故に我は之を行ふこと已に九百歳なり。」と。權に尸解の藥を授け、亦た景に隱れ形を化して去り、今湘東の山中に在り。

萼綠華は女仙である。(略)東晋の穆帝の升平三年十一月十日の夜に、羊權の家に降り(略)、以降一月に六度降りるようになった。羊權の字は道字、東晋の簡文帝の黃門侍郎で羊欣の祖父にあたる。どちらも修道に励んでおり、玄に耽り、その本質を深く感得した。

萼綠華が言うには(略)、「九嶷山中で悟りを開いて仙人になった羅郁という者であり、前世、玄州で師母のために乳母を毒殺した先罪のため謫せられた。その罪を償う」。萼綠華は、羊權に一篇の詩と火浣布の手拭い、黄金と寶石の埋め込まれた螺旋状の腕輪を贈り(略)、謫降について口外を禁じた。また、修道士と俗人の格の違いを、「修道士にとっては、錦繡は布切れのようであり、爵位は旅人のようであり、寶石は礫のようです。(略)世の人は私欲を追求し、俗務を行い、名声のために勤め、老いて死にますが、私は独り高尚で、恬淡を學び、自己研鑽に励み、長生を得るからです。したがって、私はそうして過ごし、すでに九百歳になりました。」と説明すると、尸解藥を授けて去り、現在は湘東の山の中にいるという。

・道士を仙人にさせた女仙

——「杜蘭香」(女仙七部)出『壩城集仙錄』卷五

杜蘭香なる者なり。漁父有り、湘江の洞庭の岸に於て、兒の啼く聲を聞き、四顧するも人無く、惟だ三歳の女子岸の側に在るのみ。漁父憐みて之を擧ぐ。十餘歳、天姿奇偉、靈顏姝瑩にして、天人に迫るなり。忽ち青童の靈人有り、空より下り、其の家に來集し、女を携へて去る。天に昇るに臨み、其

わからない。

・庶民の両親を助ける女仙

——「黄觀福」（女仙八部）出『壩城集仙錄』

の父に謂ひて曰はく、「我は仙女杜蘭香なり。過ち有りて人間に謫せらる。玄期に限り有り、今去らん。」と。（略）其の後洞庭の包山に於て張碩の家に降る。蓋し修道者なり。蘭香之に降ること三年、授くるに舉形飛化の道を以てし、碩も亦た仙を得。初め降りし時、玉簡、玉唾盂、紅の火浣布を留め、以て登眞の信と爲す。（略）漁父も亦た老ゆるも、因りて益少く、往往にして食らはず。亦た道を江湖に學び、之く所を知らず。

湘江の川の洞庭湖の岸で、漁夫は三歳の少女に身をやつした杜蘭香を見つけると、憐れに思い連れ帰った。十歳余りになると天人のように美しくなった。ある時、突然召使の童子が空から降り、少女を連れて去った。昇天する際、少女は漁夫に「私は仙女の杜蘭香です。罪過があつて人間界に謫せられました。神仙世界の刑期の期限が来たので、今帰ります。」と説明した。（略）その後、杜蘭香は、洞庭湖の包山にある修道者である張碩の家へ降りた。杜蘭香は三年通い、張碩に飛化の術を伝授し、張碩も仙人となった。初めて降ったとき、杜蘭香は、寶石でできた札と痰壺、紅の火浣布を家に残し、登眞の証とした。（略）一方で漁夫は老いるが、やはり杜蘭香の効験によつて、ますます若々しくなり、しばしば食事をしなかった。また、江湖で道を学んだが、どこに行つたか

黄觀福なる者なり。雅州百丈の縣民の女なり。幼くして筆を茹らはず、清靜を好む。（略）既に笄して之を嫁がしめんと欲す。忽ち父母に謂ひて曰はく、「門前の水中に極めて異物有り。」と。女常時父母の與に奇事の先兆を説くこと多くして、往往にして信驗有り。（略）隨ひて往きて之を看れば、水果たして來りて洶涌す。乃ち自ら水中に投じ、良久しく出でず。之を漉くに、一古木の天尊像を得たり。金彩已に駁らなるも、狀貌女と異なる無し。水既に澄靜なれば、便ち木像を以て路上に置いて、號泣して歸る。其の母時に來りて之を視て、憶念して已まず。忽ち綵雲仙樂有り、引衛甚だ多く、女子三人と其の庭中に下り、父母に謂ひて曰はく、「女本上清の仙人なり。小過有り、謫せられて人間に在り。年限既に畢はれば、復た天上に歸る。憂念に至ること無かれ。」（略）今來、此の地疾疫死する者甚だ多く、金を以て父母に遺り、移して益州に家すを以て凶歲を避けしむ。」と。既ち金數餅を留め、天に昇りて去る。父母其の言の如く家を蜀郡に移す。其の歲疫癘を毒し、

雅に尤も甚だしく、十に三四を喪ふ。既ち唐の麟徳の年なり。

黄觀福は、雅洲の百丈峯の民の娘で、幼少より葷菜や肉を食べず、清静な生活を好んだ。(略)成人し、両親が嫁がせようとしていたころ、突然、「門前の水中に甚だ異物がある。」と言った。黄觀福は不思議の先触れを言うことが多く、それは正しかった。(略)両親が後について行ってみると、水が他のものを押し退けて湧いていた。なんと、黄觀福は水中に身を投げ、しばらくして出て来なかった。水をさらってみると、一体の古い木製の天尊像があり、金彩はすでにまばらであったが、状貌は黄觀福と全く同じであった。溢れていた水は澄んで穏やかになったので、両親は黄觀福の形をした天尊像を道に置いて、号泣しながら帰った。母親は時々この場所にやってくる像を見、娘のことを思い続けた。ある時突然、色とりどりの仙雲が現れて、神仙の音楽が響き、黄觀福が女仙三人とともにたくさんの引衛と家の庭に降りた。「私は、上清の仙人です。先罪のため人間界に謫降されました。すでに年限に達したので、また天に帰ったのです。だから、心配する必要はありません。(略)今、この地は流行病の死者がとても多いので、金を両親に渡し、家を益州に移して凶歳を避けさせます。」と両親に説明した。この三人は小判を数個置くと、天に昇って去った。両親はその言葉に従い、蜀に家移した。その年の流行病は人々

を痛めつけ、常に酷く、十人のうち三、四人が亡くなった。それは、唐の麟徳年間の出来事だった。

・人間と結婚し、親を助ける女仙

——「崔少玄」(女仙十二部) 出『少玄本傳』

崔少玄は、唐の汾州刺史崔恭の小女なり。其の母神人を夢みるに(略)乃ち孕み、四月にして少玄を生む。既に生まれて、異香人を襲ひ、(略)右手に文有りて曰はく、「盧自列が妻なり。」と。後十八年盧陞に歸ぐ。陞の小字自列なり。歳餘にして、陞閨中に從事たり(略)忽ち碧雲東峰より来るを見る。中に神人有り、翠冠緋裳にして、陞に告げて曰はく「玉華君来るや。」と。(略)妻曰はく「扶桑夫人、紫霄元君、果して來りて我を迎ふ。事已に明らかなり。難か復た隠諱せん。」と。遂に衣を整へて出でて神人を見る。對話すること之を久しくす。然れども夫人の音、陞能く辨ずる莫く、逡巡して揖して退く。陞拜して之を問ふ。曰はく、「少玄胎育の人と雖も、陰陽の積む所に非ず。昔無欲天に居りて、玉皇の左侍書と為る。(略)嘗て貶落し、犯爲する所同宮の四人と、退きて靜室に居り、其の事を嗟嘆すれば、恍惚として欲想有るが如し。太上之を責め、謫して人世に居らしめ、君の妻と爲りて、二

十三年なり。」

崔少玄は、唐の汾州の刺史・崔恭の娘である。崔少玄の母はある夜夢を見て（略）神人に授けられて妊娠し、十四月目に崔少玄を生んだ。生まれてすぐに不思議な香りを放ち、（略）右手には「盧自列の妻となる。」と書かれた文を握っていた。十八年後、崔少玄は文の通り盧陞に嫁いだ。陞の小字は自列である。一年余りして、盧陞が閭に向かう途中（略）、碧雲の中から神人が現れて「玉華君は来るでしょうか。」と告げた。（略）崔少玄は「やはり扶桑夫人と紫霄元君が私を迎えに来たのでしょうか。事情がすべて明らかになったので隠しておけません。」と言うと、衣を整えて出て、神人と長いこと対話した。盧陞には扶桑夫人らの発する音を理解することができず、頭を下げて事情を尋ねた。扶桑夫人が説明するには「崔少玄は、大切に育てられましたが、善行を積みませんでした。昔、無欲天に居て、玉皇大帝の左侍書と為りました。（略）かつて同宮の四人とともに罪を犯し、退いて静室に居ましたが、そのことを嘆き、欲望を抱いて恍惚としていたので、太上道君に責められ、人間界に謫降されたのです。そして、あなたの妻となつて、二十三年過ごすことになりました。」

（略）後二年、陞に謂ひて曰はく、「少玄の父は、壽算二月十七日に止る。某神仙の中人と雖も、人世に生まれて、撫養の恩有

るが爲に、若し之を救はずんば、其の報を枉げん。」と。乃ち其の父に請ひて曰はく、「大人の命は、將に二月十七日に極まらんとす。少玄劬勞の恩を受くれば、護らざるべからず。」と。（略）少玄凡に當たり授くるに功章を以てし、青紙に寫し、封するに素函を以てし、之を上帝に奏す。又南斗注生真君を召し、上帝に附奏せしむ。須臾にして、三朱衣の人有り空よりして來り、少玄の前に跪き、脯羞を進め、酒三爵を噉せしめ、手に功章を持ちて去る。恭大いに之を異とし、私かに陞に訊ぬも、陞之を諱む。

（略）二年後、崔少玄は盧陞に「私の父は、二月十七日に亡くなります。私は神仙といつても、人間界に生まれて、育てていただいた恩があるので、もし父を救わなければ、報いることを歪めてしまうことになりましょう。」と説明した。崔少玄は崔恭に「あなたの命は、二月十七日に果てようとしています。私は苦勞して働き育てていただいた恩を受けたので、お守りしないわけにはいきません。」と言った。（略）机に向かって功章を与え、青紙に書き寫し、簡素な箱に封じて、扶桑大帝に奏上した。また、南斗注生真君を召して、扶桑大帝に付帶して奏上させた。すぐさま、朱衣を身にまとった三人の天人が空より来て、崔少玄の前に跪き、干し肉を勧め、酒三杯を飲み干させ、功章を手にとって去った。崔

恭はこの光景を非常に不思議がり、ひそかに盧陲に尋ねたが、盧陲は秘密を守った。

經ること月餘にして、遂に陲に命じて語りて曰はく「玉清の真侶、將に予を太上に雪ぎ（略）神に反り、無形に還り、復た玉皇に侍し、將に彼の玉清に歸らんと欲す。（略）又父を救ふの事以て、神仙の術を泄露すれば、久しく留まるべからず。人世の情は、此に畢る。」と。陲其の前に跪き、嗚呼し流涕して曰はく「下界の蟻虱、上仙を黷汚し、永に穢濁に淪み、昇擧するを得ず。乞ふらくは指諭を賜ひて、以て沉痾を救はんことを。久永其の恩を忘れず。」と。

ひと月余りが経ち、崔少玄は盧陲に「玉清の真侶が、太上道君に私の汚名を雪いでくれたので（略）私は神仙に戻り、無形に還り、また玉皇に侍して、彼の玉清に帰るつもりです。（略）また、父を救ったことで神仙の術を洩らしてしまったのですから、私は人間界に長く留まることはできません。人の世の情は、ここで終わります。」と言った。盧陲は崔少玄の前に跪き、泣き叫んで「下界の蟻虱のような私は、上仙であるあなたを穢し、長くこの世の穢濁に沈むばかりで、登仙することはできません。どうかお導きいただき、いつまでも治らない病を抱えたような穢れた私をお救いください。一生その恩を忘れません。」と言った。

少玄曰はく「予詩一首を留めて以て子に遺さん。（略）『得之一元、匪受自天。太老之真、無上之仙。光含影藏、形於自然。真安匪求、神之久留。淑美其真、體性剛柔。丹霄碧虛、上聖之儔。百歲之後、空餘墳丘』。陲載ち其の辭を拜受するも、其の義理に晦ければ、跪きて講貫し、以て指明を爲さんことを請ふ。少玄曰はく「君の道に於ける、猶ほ未だ熟習せず、上仙の韻、昭明に時有り。（略）未間但だ當に之を保つべし。」と。言ひ畢りて卒す。九日葬る、棺を擧ぐれば空しきが如し、櫬を發きて之を視れば、衣を留めて蛻す。室に處ること十八、閨に居ること三、洛に歸ること二、人間に在ること二十三年なり。

崔少玄は、「詩を一首を残しましょう。（略）『之を一元に得るは、天より受くるに匪ず。太老の真、無上の仙たらん。光は含み影は藏し、自然に形はる。真安は求むるに匪ず、神の久しく留まる。淑美なるかな其の真。體性は剛にして柔なり。丹霄碧虛に、上聖の儔たり。百歳の後、空しく墳丘を餘す』。盧陲はその言葉を受するも、その意味を理解できないので、跪いて講習し、意味を明示してもらうよう頼んだ。崔少玄は「あなたは道ということにおいて、やはりまだ熟習していません。上仙の韻の意味が明らかになる時がきます。（略）その時にならない間は、ただこの詩を大切に持っているのがよいでしょう。」と言うと、言い終わるなり亡

くなくなった。九日後に葬った。棺を持ち上げると軽かったので、中を見ると衣を留め、亡骸はなくなっていた。崔少女は、生家で住むこと十八年、閨にいること三年、洛に帰ること二年、人間界で過ごすこと二十三年であった。

・人間と結婚し、深く交流する女仙

——「趙旭」（女仙十部）出『通幽記』

天水の趙旭は、少くして孤介にして學を好み、姿貌有り、清言を善くし、黄老の道を習う。（略）嘗て一女子を夢見るに、青衣を衣、牖間に挑笑す。覺むるに及びて之を異とし、因りて祝して曰はく「是れ何の靈異ぞ。愿はくは仙姿に覲ひ、幸ひに神契を賜はらんことを。」と。夜半、忽ち窗外に切切たる笑聲を聞く。旭其の神なるを知り、復た之を祝すれば、乃ち言ひて曰はく、「吾上界の仙女なり。君累徳ありて清素なりと聞く。幸ひに寤寐に因り、愿はくは清風に託せんことを。」と。旭驚喜し、（略）乃ち燈を廻らし席を拂ひて以て之を延く。

天水の趙旭は、若くして世人と調和せず、學を好んだ。麗しい容姿をしていて、清言をよく行い、黄老の道を習った。（略）かつて、夢で青い衣を着て窓辺で笑う一人の女を見た。夢から覚め、これを特別なことと思い、「これは靈異だろう。仙人に会い、あり

がたく神契をいただきたく思う。」と祈った。夜中、窓の外で切々たる笑い声を聞いた。趙旭はそれを仙人だと気づき、祈ったところ、仙人は「私は天上界の女仙です。あなたは累徳があり、清素な人間だと聞きました。どうぞ寝ているときも覚めているときも高潔なお人柄に我が身を託したく思います。」と言った。趙旭は驚き喜んで、（略）灯りを点け、敷物を払って女仙を招いた。

（略）女笑ひて曰はく「吾は天上の青童にして、久しく清禁に居り。幽懷阻曠にして、位は末品に居り、時に世念有り、帝我を罰して人間に隨所に感配せしむ。君、氣質虚爽、體洞玄默なるを以て、幸ひに清音を託し、愿はくは神韻を諧へんことを。」と。旭曰はく、「蜉蝣の質、息を刻漏に假るに、意はざりき、高真濟度を俯垂されんとは。豈に敢て妄りに俗懷を興さんや。」と。女乃ち笑ひて曰はく「君宿世道有り（略）相當に與に洞簫を紅樓の上に吹き、雲璈を碧落の中に撫すべし。」と。（略）夜鼓あり、乃ち寢具を施さしむ。旭貧にして施すべき無し。女笑ひて曰はく、「仙郎を煩すこと無かれ。」と。乃ち命じて寢内を備へしむ。（略）其の室中の施設珍奇にして、知る所に非ざるなり。遂に手を内に携ふ。其の瓊姿發越し、世に希に傳はること罕なり。

（略）「私は天上の青童で、長く皇宮で働いていました。心がしつ

かりしておらず、仙品は一番下の位でした。時に俗世に執着する心があったので、帝が私を罰して人間界のあちこちで心に感じて連れ合いとなることをさせました。あなたは心体ともに清静で無為ですので、どうか清音を託し、神韻を整えたく思います。」と言うので、趙旭は「私は、わずかな時間の生を得ている者なのに、得道の女仙がお救い導いてくださるとは思いませんでした。

どうしてみだりに俗情を抱きましようか。」と言った。女仙は笑って、「あなたは前世に得道しています。(略)共に簫を紅樓の上で吹き、雲璈を大空で奏でましよう。」と言った。(略)戊夜を知らせる鼓の音が鳴ったので、女仙は寝具を用意させようとしたが、趙旭は貧しく、用意することができなかった。女仙は、「仙郎に手間をかけさせないでください。」と笑って言うと、仙郎に命じて寢床を備えさせると(略)部屋の中が知らないところのように様変わりした。手を取り合うと、その美しい姿の輝きが発散して、世にまれで伝わることもないものであった。

夜深くして、忽ち外に一女の「青夫人。」と呼ぶを聞く。(略)乃ち起ちて之を迎ふ。(略)乃ち下りて曰はく「吾は嫦娥の女なり。君、青君と集會するを聞く、故に逃るるを捕ふるのみ。」と。便ち室に入る。青君笑ひて曰はく「卿何を以て吾が處を知るや。」と。答へて曰はく「佳期相告げずとも、誰か過たん

や。」と。相與に笑樂す。(略)既に同じく歡洽す。將に曉けんとす、(略)約するに後期を以てして、答へて曰はく「慎みて之を世人に言ふ勿かれ。吾相棄てざるなり。」と。戸を出づるに及べば、五雲の車二乗に有り、空中に浮かぶ、遂に各車に登りて訣別す。靈風颯然として、虚を凌ぎて上り、極目乃ち滅す。

夜更け、外に一人の女の、「青夫人。」と呼ぶ声が聞こえたので(略)起つて外の女仙を迎え入れようとした。(略)女仙は降りてきて、「私は嫦娥の娘です。あなたが青童君と一緒にいると聞きました。したがって、逃げるのを捕らえようとしているまでです。」と言うと部屋の中に入った。青童君は笑って、「あなたは何故私のいるところがわかったのですか。」と聞いた。娘は「佳期は互いに知らせずとも、誰が間違えましようか。」と答え、二人はともに笑った。(略)趙旭も同じように打ち解けた。夜が明ける頃になり、(略)また後の機会に会うことを約束すると、青童君は「このことを世人に言わないよう気をつけてください。私はあなたを見捨てません。」と言った。青童君と娘が戸を出たところ、五色の雲が描かれた車が二つ空中に浮かんでいた。それぞれ車に登って別れを言うと、靈風がさつと吹いて、車は空を昇り、見えないうちで消えた。

(略) 數夕を隔てて復た來る。(略) 其の從ふ所の仙女益多く、歡娛日に洽し。旭の爲に行厨を致し、珍膳は皆識るべからず、甘美常に殊なり。一食する毎に、旬を経て饑えず。但だ體氣の冲爽なるを覺ゆ。旭因りて長生久視の道を求め、密かに隱訣を受く。(略) 旭亦た精誠感通す。

(略) 青童君は數晩おきにやつて來た。(略) 青童君には多くの女仙が付き従つており、その數はますます多くなり、歡娛は毎回報り広げられた。青童君は趙旭のために酒食を送り、それは初めて食べるような味だった。一食すると十日ほど経つても飢えなくなつた。ただ心身が清々しく爽やかになる感覚を覺えた。趙旭は長生久視の道を求め、ひそかに青童君に隱訣を受けた。(略) 趙旭は精神が感通した。

後歲餘、旭の奴琉璃の珠を盗み市に鬻ぎ、(略) 官之を勘すれば、奴悉く狀を陳ぶ。(略) 其の夜女至り、愴然として容無くして曰はく、「奴吾が事を洩らせり。當に逝くべし。」と。旭方に奴に失するを知りて、悲しみ自ら勝へず。女曰はく、「甚だ君が心を知る。然れども事亦た合に長へに君と往來すべからず。運數然るのみ。此より訣別せん。努力して修持せば、當に速かに相見るべきなり。其の大意は心死するを以て身生くべく、精を保ちて以て神を致すべし。」と。遂に『仙樞龍席隱訣』五篇を留む、

内に隱語多ければ、亦た指して旭に驗せしめ、旭之に洞曉す。將に旦ならんとして去れば、旭悲哽して手を執る。女曰はく、「悲は何より來るか。」と。旭曰はく、「心の牽く所に在るのみ。」と。女曰はく、「身心の牽くところと爲れば、鬼道至る。」と。

言ひ訖り、身を竦て上り、忽ち見えす。室中の簾帷器具、悉く無し。旭恍然として自失す、其の後寤寐に彷彿として、猶ほ尚ほ往來するがごとし。

その後一年余りして、趙旭の下男が、青童君から貰つた琉璃の玉を盗んで市で売ろうとした。(略) 官人がこのことを取り調べると、下男はすべての事情を述べた。(略) その夜、青童君がやつて來て、悲嘆に暮れたようすで、「あなたの下男が、私のことを洩らしました。私は去らなければなりません。」と言つた。趙旭は、その時下男が宝物を失くしたのを知つて、悲しみを耐えることができなかった。青童君は、「あなたの心はとてもよくわかります。しかし、やはりあなたと永久に往來することはできません。これが運命なのです。これより訣別します。あなたが努力して修持すれば、速かに会うことができるでしょう。その大意は、無我の境地で身体が生きるようにするべきであり、精神を保つて神仙に至ることができのです。」と言つて、『仙樞龍席隱訣』の五篇を留めた。その中には隱語が多いので、指して趙旭に調べさせ、趙旭はこれに精

通した。夜が明けるから去ろうとすると、趙旭は悲嘆して、青童君の手を取った。青童君は「悲しみは何処から来ますか。」と尋ねると、趙旭は「心の動きに引かれて生じています。」と答えた。青童君は、「心に動かされれば、邪道に至ります。」と言ひ、言い終わると高く立ち上がって昇り、見えなくなった。青童君が施した部屋の中の簾帷はすべてなくなった。趙旭は茫然自失として、その後は寝ても覚めても思い出し、未だ往来しているかのようだった。

・悲しむ人間、泣かない女仙

ここまで読んだ五人の女仙は、殺人、欲想を抱いた、世俗への執着があった、あるいは「小過」など、犯した罪はさまざまであり、謫降の仕方もさまざまである。これらの話の共通点は、神仙思想や道教の教えを絶対的なものとして扱う姿勢を保っているところであり、彼女ら女仙たちも、また、人間との関わり方が共通している。萼緑華は、謫降先の羊權に世話になった後でも、地上を「臭濁」と見なし、道士の優位性を語って去った。杜蘭香は、仙人の資質を備えた張碩に仙術を教えたが、長年面倒を見てくれた漁夫には何ももたらすことはなかった。黄觀福や崔少玄は、道士でない人間を報恩のために救ったが、それは圧倒的な仙人の力

を用いて行われた。青童君は人間と結ばれ、それによって罪を償い昇天した後も往来を重ねたが、禁忌に触れればすぐに去っていった。仙人にとつて地上は謫せられる下位の世界であり、人間との間には、たとえ結婚したとしても、長らく時を過ごしたとしても「道」において格差が生まれる。あくまで、その絆はかりそめのものであり、一度帰ってしまったば、あるいは相手が禁忌を犯して会えなくなってしまうば、途切れてしまうものなのである。そして、昇天し別れる時、仙人は決して取り乱さない。黄觀福の両親は娘を失ったことを悲しんで泣き、母親は娘の形の像を見ては、娘を思つて悲しんだ。盧陞は、崔少玄との別離を知つて泣き叫び、下等な人間である自身の存在を深く悲しんだ。趙旭は、青童君が去ると絶望し、無氣力になって過ごした。心のままに悲しみ泣くのはいつも人間のほうである。仙人にとつて、心のままに感情が動かされることは自身が未熟な状態であることを指すからである。では最後に、六人の神仙譚の中で唯一泣き、地上に留まった女仙を紹介したい。

・地上に残る女仙——「妙女」（女仙十二部）出『通幽記』

唐貞元元年五月。宜州旌德縣の崔氏の婢、名は妙女。年十三四可り。夕に庭中に汲み、忽ち一僧を見るに、錫杖を以て連撃し三たび下る、驚怖して倒る。便ち心痛むと言ひ、須臾に

して迷亂し、針灸も能く知る莫し。(略)瘡ゆるに及びて、復た食らはず、(略)既にして清瘦爽徹、顔色鮮華にして、方て説く、「初め昏迷の際、一人を見るに引きて白霧に乗り、一處に至る。宮殿甚だ嚴かにして、悉く釋門の西方部の如し。其の中の天仙、多く是れ妙女の族なり。」と言ふ、「本是れ提頭の賴吒天王の小女にして、天門間の事を洩らす爲の故に謫せられて人世に墮ち、已に兩び生まる。(略)」と。

唐の貞元元年五月。宜州の旌德県の崔氏の下女で、十三、四歳の妙女という娘がいた。夕方、庭で水汲みをしていると、一人の僧侶が現れ、妙女の腰を錫杖で三度連打した。恐怖のあまり妙女は倒れ、心臓の痛みを訴えた。すぐに精神が迷亂し治療の甲斐もない。(略)回復しても食事は摂らず、(略)そうしているうちに身体は引き締まり、顔色も艶やかになった。妙女は、「混迷した意識のなか、一人の天人に引かれて白い霧に乗って天界に連れられました。宮殿はとても嚴かで極楽浄土の釈門のようでした。その中にいる天仙の多くはみな、私の家族でした。」と説明した。さらに、「私は提頭賴吒天王の末娘でしたが、天門間の秘事を漏らした罪で謫降させられ、人間界に二度生まれ変わりました。(略)」と語った。

言ふ、「父は姻族とともに世間に遊び尋索し、今此に於て方に見

るを得たり。前に見る所の僧は腰上を打ち、女をして藏中の穢惡の俗氣を吐瀉して、然る後昇天するを得しめんと欲す。天上は居處華盛にして、各姻戚及び奴婢有り、人間と殊ならず。(略)」と。此くの如くにして五六日病臥し、先世の事を叙す。

妙女は、「父と姻戚の者が地上世界を巡って尋ね求め、今、ここで私を発見しました。前に僧侶に腰を打たれたのは、私の臓中の穢れた俗氣を吐き出させ、その後で昇天させようとしたのです。天上のすみかは華やかで、親戚や下人がいるところは人間世界と同じです。(略)」と言うと、そうして五、六日病臥し、先世のことを説明したのである。

一旦、忽ち上尊及び阿母並びに諸の天仙及び僕隸ら、悉く來りて參謝すと言ふ。即ち靈に託して言ひて曰はく「小女は愚昧にして、落ちて人間に在り、久しく存卹を蒙り、相愧づること極まり無し。」と。其の家初め甚だ驚惶し、良久しくして、乃ち相與に問答すれば、仙者悉く之に憑きて言を叙す。又曰はく「暫く小女子の宅を借り、世人と言語す。」と。其の上尊の語は、即ち是れ丈夫の聲氣あり、善倫阿母の語は、即ち是れ婦人の聲にして、各其の語を變ふ。此くの如くして或は來り或は往き、日月漸く久しく、談諧戲謔、一に平人の如し。來る毎に即ち香氣室に滿ち、有る時は酒氣、有る時は蓮花の香氣あり。後妙女の

本状故の如し。(略)

ある日、両親や諸々の天仙および下人たちがごとごとく降りてきて、参謝すると言った。妙女の靈魂に憑依して、「娘は愚昧で、謫降されて人間界に在り、長くお恵みをいただき、まさに面目ないこと極まりない。」と言った。崔氏の家の者は驚き慌てたが、しばらくして共に問答すると、天人たちは皆妙女に憑いて発言する。

また、「しばらく妙女の家を借り、世人と話そう。」と言う。父親(上尊)の言葉は普通の男性が喋るようであり、母親(善倫阿母)の声も普通の婦人のそれと変わらず、おのおの妙女の語を変える。このようにして一方では行き一方では来て、長い日月が経った。

天人たちは談笑したり、おどけたわむれたりし、普通の人間のようであつた。彼らが来るたびに部屋に香氣が満ち、ある時は酒氣、ある時は蓮の花の香氣があつた。のちに妙女のようなすは前のようなになった。(略)

(略)後に一婢有り、卒かに病に染まり甚だ困しむ。妙女曰く「我爾の爲に大郎に白して、兵を請ひて救はん。」と。女即ち睡狀の如し、須臾にして却て醒め、兵已に到ると言ひ、急ぎ灑掃せしめ、香を添へ室を淨めしむ。遂に起ちて兵馬を支分し、幾人かを某處に匹配して檢校せしめ、幾人かを病人の身の上に於て、邪鬼を束縛せしむ、其の婢即ち瘡ゆること故の如し。

(略)一人の下女が、結局病に罹りとても苦しんだ。妙女は「私が貴女のために兄に告げて、兵を請いて救いましょう。」と言った。妙女は眠つたようになったかと思えばすぐに目覚め、兵がすでに到ると言うのと、急いで部屋を掃除させ、香を添えて部屋を清めさせた。ついに立ち上がったて兵馬を支分すると、幾人かある所に分配して査察させ、また幾人かを下女の身の上に置いて、邪鬼を捕まえさせた。すると、その下女は治り、もとのようになった。

(略)一タ、「娘子の一塊と小娘子の一塊とを將て遊看し去き、善倫の友と言笑せしめん。」と言ふ。是の夕、娘子等並びに夢に一處に向かひ、衆人と遊樂す。妙女天明に至り、便ち娘子に夢中の事を問へば、一一皆同じきなり。

(略)ある夜、「上の娘の魂と下の娘の魂と一緒に天界に觀光に行つて、母の友人と談笑させよう。」と言う。この夜、娘子たちは一緒に夢で同じところに向かい、大勢の人と遊樂した。朝になり、妙女は娘たちに夢のことを聞くと、同じ内容であつた。

此くの如くすること月餘にして、食を絶ち、忽ち一日悲咽して言へらく「大郎と阿母某を喚びて歸らしむ。」と。甚だ悽愴たり。久しく世間に在り、娘子を戀慕すれば、捨て去るに忍びずと苦言す。此くの如くにして數日涕泣す、又言ふ「合に世人と往來すべからざるに、汝は須らく住まるべしと意ふ。之を如奈何せ

ん。」と。便ち空中に向かひて辭別し、詞頗る鄭重にして、此より漸く言語無し。娘子に告げて曰はく、「某相戀ひて去らず、即ち人間に在り、還た須らく飲食すべし。但だ某に一の紅衫子の着と瀉藥を與えよ。」と。言の如く之を與ふれば、遂に漸く飲食す。時に未來の事を説くと雖も、皆應無し。其れ繁細有り、具さには録する能はず。其の家事狀を紀し盡くすこと此くの如きも、其の婢後復た如何なるかを知らず。

このようにひと月ほど過ぐすと、妙女は食を絶つようになり、ある日、妙女は泣き悲しんで「天界の兄と母親が私を呼び帰そうとしています。」と言ひ、たいそう悲しみ痛むようすであつた。長く人の世で暮らし、娘たちを慕っているで見捨てて去ることができないと苦しうに言ひ、このようにして数日泣いて過した。

また、「世人とは往来するべきではないのに、お前はここに留まるべきだと思つている。どうしようもない。」と（自身に）言うと、妙女は空に向かつて丁重に天界との惜別の言葉を伝え、これ以降しだいに喋らなくなる。娘に「私めは、あなたたちと思ひ合つているので天界には去らず、人間界に留まります。また再び人間の食事を摂るのがよいでしょう。私めに紅い衣服と瀉藥を与えてください。」と伝えた。言う通りに与えたところ、だんだんと普通の食事を摂るようになった。時に予言をすることもあつたが、全

く応えなくなつた。それは煩わしいほど細かくあるので、詳細に記録することはできない。この崔氏の家で起きた事柄を記録し尽くしたのは以上であるが、その後妙女がどうなつたかは不明である。

・「妙女」と「かぐや姫」

「妙女」では、これまでの神仙譚とは大きく異なり、地上を見下す姿勢は見られず、むしろ非常に好意的に交流している。道士の優位性をはじめとした思想的部分も排除され、その点で『竹取物語』と共通する。しかし、両者には決定的な視点の違いがある。

「妙女」では、常に神仙たちが主体にある。崔氏の主人が、夫人が、娘たちがどのような人物で、どのように妙女と心を交わしたか、それらは取り沙汰されない。妙女が家の者に降りかかる苦難を解決したり、娘たちの遊魂を天上界に連れて行つて遊樂したりと、女仙やその身内の仙人たちの姿——神仙の持つ不思議な力の数々が人間を通して描かれる。それは超常現象を記した奇異譚の域を出ないのである。対して、『竹取物語』に描かれていたもの、それは人間の姿ではなかつただろうか。

三 『竹取物語』の視点——女仙を通して描かれる「人間」

かぐや姫は「心ざし」を量るという口実で五人の貴公子に難題を持ちかけた。その難題に対して貴公子たちは、或いはかぐや姫を騙し、或いは愚直に取り組み、皆一様に愚かな顛末を辿り世間に笑われ恥をかいだが、皆一様に持ち得る限りの力を注ぎ、懸命に尽くした。これらは貴公子たちへの試練であったが、かぐや姫にとつても受難であった。かぐや姫はその苦難を圧倒的な仙人の力を用いて乗り越えることはせず、貴公子たちに振り回され、不安を感じ、不愉快になり、彼らが失敗すると安堵して喜び笑い、同情した。そして帝からの宮仕えの命を聞き、「あまたの人の心ざしおろかならざりしを、むなしくなしてしこそあれ。昨日今日、帝のたまはむことにつかむ、人聞きやさし」（六〇頁）と心を尽くした者たちへの敬意を表し、帝を拒絶する。帝は初め権力を駆使してかぐや姫を得ようとしたが、その強固な意思を前にして、無理強いすることをやめた。そして、帰りにかぐや姫の返歌を受け、帝はかぐや姫の内面にも強く惹かれるのである。この世のすべてをほしいままにできるはずの帝は、かぐや姫に触れて欠乏感を抱き、心の底から彼女を必要とする。だから、かぐや姫もその真心に応じようと心を込めて手紙のやり取りをするようになる。

つまり、かぐや姫は超自然的な女仙でなく、対等な人間として彼らと向き合っていたのである。

神仙譚では、人間に好意的な仙人が存在し、修行を積めば人間でも仙人になれるという連続性があった。一方で『竹取物語』において両者は隔絶されている。妙女は自身の進退を自身で決断することができたが、かぐや姫は帰還の延長すら許されなかった。ましてや翁がどれだけ屋敷の奥にかぐや姫自身を閉じ込めようとも、帝がどれだけ兵を集めようとも、敵うはずがない。その天上の残酷なまでの絶対性には、人間を卓越した存在には敵わないという絶念と、そうした存在への紛うことなき羨望の眼差しが見て取れる。そのうえで、作者の視点は、地上にある。ただ一人の女性をこの地上に留めておくために怒り、足掻き、どうしようもない現実には抗う翁らと、ただ泣くことしかできない無力なかぐや姫。人の心無くす前にと書き残した手紙にしたためられた、自身のためにたくさんの兵を遣わしてくれたことの感謝と、強情に抗命したことを無礼だと思われていることへの遺憾の念、帝を「あれ」と詠んだ深い愛惜の情。そして、地上の頂点に立つ帝が「不死」を拒絶すること。『竹取物語』に描かれていたのは、嘘を吐いて人を騙し、人を嘲り、人に惑わされ、人に執着する、愚かで醜く、無力な、そして尊い人間の姿ではなかったか。あらゆる物語

の要素や宗教観を設定に組み込み、超常的な世界への憧れも確かに描きながら、物語が真に描こうとしていたのは、女仙であるかぐや姫が流謫から昇天までの有限の時の中で人間と心を交わし、「あはれ」を解すという、「人間であること」への強い肯定だったのではないか。

人間の姿そのものを描き出そうとしたところに『竹取物語』の真髓があり、それこそが「物語」のおやたる評価の所以ではないかということを描いて本稿を締め括りたい。

謝辞

本研究に際して、中国の神仙譚を読み進めるにあたり、ご指導下さった加藤敏千葉大学名誉教授からは、訓読・口語訳の作成にて多大な助言を賜りました。深く感謝を申し上げます。

注

注1 片桐洋一、高橋正治、福井貞助、清水好子校注・訳『新編日本文学全集（12）竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館 一九九四年）七二頁。第三節での本文の引用及び頁数も、全て同書に拠る。

注2 野口鉄郎、坂出祥伸、福井文雅、山田利明『道教事典』（平河出版社 一九九四年）三八一頁

注3 李昉等編『太平廣記會校』（北京燕山出版社 二〇一一年）（こまち ゆき 二〇二〇年日文卒）